九州産業大学国際文化学部紀要　第9号 29—53（1997）

ガーランドの文明批判：三つの視点

——*Main-Travelled Roads* への道——

山　下　　勉

（1997年5月21日受理）

1890年代の「金ぴか時代」のロマンテシズムからリアリズムの過渡期を時代背景として，Hamlin Garland は故郷中西部農村社会を創作舞台として，「お上品な伝統」からの独立を説き，ローカル・カラーの名においてリアリズムを主張した作家である。

過渡期とは前後の傾向が混在し矛盾や曖昧さを内在するように，ガーランド自身もやがてリアリズムからロマンスへと大きく方向転向することになる柔盾を抱えていた。彼のリアリズム期においてさえ，ロマンスとリアリズム，オプティミズムとペシミズム，自然主義の有無等々の全く相反する要素を混在させていた。

このような矛盾は，ガーランドの「開拓農民の息子」「リホーマー」「リアリスト」の三つの基本的立場に起因すると考えられる。これらの視点は相互に補充しあい展開する面と，相互に対立を内在する面がある。それがゆえに曖昧さを生むことにもなるのである。ガーランドの位置付けのために，規定することよりも混在する理由を明らかにする方が重要であろう。

1

ガーランドのテーマが作家活動の当初より一貫して文明批判にあることは，自ら作家経歴の始まりと語る，1887年夏の第1回目の故郷中西部への帰省旅行の経緯を振り返れば明らかである。即ちこの旅行が創作舞台の発見，及び以後の創作方向の決定付けることになったのである。ボストンへ文学修業に出て以来，赤貧の中独学の末に雄弁学院（School of Oratory）の講師として認められるまでになった彼は，この時の心情を自伝において「文学上の成功」を得たとは言えないにしても，一応の成功者として「生計を立てる能力に膨らみゆく自信」[1]とロマンティクな郷愁に満ちたものであっ

[1]Garland, Hamlin. *Roadside Meetings.* New York: the Macmillan Company, 1930, p.109.

たと語っている。当然取材旅行も兼ねていたが，1884年修行に旅立った当時の文明の中心ボストンへの幻想はもはや抱いてはいないとは言え，やはり念頭にあったのは「少年時代のある時期をなんらかの形で文学にできるであろう」[1]とかっての少年期の目に映ったロマンチックに彩られた開拓初期の時代であり，この「中西部を賛美したい欲求が膨らんできた」と，作家としても旅行時の気分そのままに何の問題意識も持ち合わせていなかった。

> New England, rich with its memories of great men and noble women, had no direct inspiration for me, a son of the west. It did not lay hold upon my creative imagination, neither did it inspire me to sing of its glory. I remained immutably of the middle border and strange to say, my desire to celebrate the west was growing.[2]

ガーランドが一家の開拓の後を辿りアイオア，サウス・ダコタと回るなかで目撃したのは経済の急激な悪化による劣悪な状況下で苦境に喘いでいる人々の姿であり，かっての仲間達又憧れの女性の惨めな姿であり，何よりも母の変わり果てた姿であった。この現実に衝撃を受けて，ロマンチックな郷愁は消え去ったのである。「さらに私は開拓者達の状況に対してある責任を認めた」"Furthermore I acknowledged a certain responsibitity for the conditions of the settlers...."[3]と，もはや中西部から逃げ出した傍観者ではいられないとの認識もさることながら，何にもまして家族への責任を放棄して逃避した罪の意識により，現実への激しい憤りをかき立てられた「怒れる若者」となったのである。

ジョセフ・カークランドからは"You're the first actual farmer in American fiction -now tell the truth about it,"[4]との助言にも励まされて，次のように「美よりも真実のほうがより優れた特性」であり，芸術家の使命は「正義の影響力を広げること」を自己の文学上の理念に，中西部の農村社会の現実を創作舞台として作家としての実質上の創作活動を開始したのである。

> Obscurely forming in my mind were two great literary concepts-that truth was a higher quality than beauty, and that to spread the reign of justice

---

[1] *Ibid.*, p.110.
[2] Garland, Hamlin. *A Son of the Middle Border.* New York: the Macmillan Company, 1962, p.296.
[3] *Ibid.*, p.301.
[4] *Ibid.*, p.314.

should everywhere be the design and intent of the artist. The merely beautiful in art seemed petty, and success at the cost of the happiness of others a monstrous egotism.[1)]

2

このように社会の現実によって喚起された問題意識を作品へと昇華させる際に，如何なる視点より対峙するのかが重要な問題となる。彼は自伝で回想している三つの視点「以前の住人」「都市の人間」「リホーマー」が如何なる内容であったのかの検討から始めなければならない。

I perceived the town from the triple viewpoint of a former resident, a man from the city, and a reformer, and every minutest detail of dress, tone and gesture revealed new meaning to me. … At the moment nothing glozed the essential tragic futility of their existence.[2)]

まず第一にガーランドは「以前の住人」即ち「開拓農民の息子」として中西部農村の実体験者であった。一家の移住の経緯は西部開拓史と軌跡を同じくするものであり，1862年のホームステッド（自作農場）法の発展から崩壊への歴史でもあった。その初期は厳しい自然と労働環境にあるとはいえ自作自営の可能な時代であった。70年代初期には豊作期を迎え明るい未来を予想させるものであったが，同時にそれは「第二の開拓ブーム」を引き起こし，80年代よりさらに西への集団的大移動の時期に入るのである。しかしながら開拓は西へと拡大するにつれて，一方では砂漠神話によって語られたように少ない降雨量をはじめとしてより一層厳しい自然環境に直面しなければならなかった。又ホームステッド法が取得土地の総量規制や入植以外の土地取得の禁止などを欠いていたために，鉄道への公有地分与，投機による土地価格は高騰する一方で，産業革命によってもたらされた機械化の発達による大規模経営と鉄道，穀物取引所，倉庫等運搬手段の支配により穀物は低価格への道を辿ることとなり，小規模の自営農民は存続基盤を脅かされ，抵当，小作へと崩壊の過程を経たのである。アイオワの丸太小屋に生まれ，農場生活の傍ら羨望の的であるセミナリーに行き，84年経済情勢の悪化の途中でボストンに逃避し，それ以後のさらに深刻な状況を身を持っては知

[1)] *Ibid.*, p.317.
[2)] *Ibid.*, p.306.

らないガーランドにとっては，彼の中西部観の根底をなすのはアイオワでの「すばらしい生活」「最も幸福な時期」と回想する少年時代，すなわち開拓初期の都会からの文化が押し寄せない自然の中の狩猟，収穫時の共同作業，素朴な人間関係の存在する自営農の可能な時代であった。

この時代の精神的理念は，古い身分も階級もなく対等で頼れるものは自己のみの社会のなかで，独立・自営の開拓農民の生活から生じる所謂「開拓者精神」である。ジェファーソン流民主主義を踏襲する自由・平等への信頼と伝統的道徳観と，成功の機会を求めて止まない楽天的な個人主義である。

「開拓農民」の典型を，少年時代の僕の英雄と慕う母方の伯父 David McClintock や「厳格な主義，独立独歩と不屈の主義である」"His was a stern school, the school of self-reliance and resolution"[1]父などに見て取り，David を"Daddy Deering"の，父を"The Return of a Private"のモデルとし，彼らの生き方への共鳴と賛美に「開拓農民」の継承者としてのガーランドを認めるのである。

時代の特徴を自然の「魅力ある景観」と開拓の「英雄的な時期」即ち，開拓者は「冒険者の気迫」と「戦士の勇気」を持っていた時期であるとの時代認識を述べ，その上で育った環境の重要性を「子供時代の印象が作家の作品の基礎になっている基本的なものである」と少年時代が作家としての自己の原点にあると時代精神の影響を強く受けていることを認めている。このようにガーランドは「開拓農民の息子」として，楽観的な個人主義と伝統的なモラリストを受け継いでいるのである。

> The emergence of an individual consciousness from the void is, after all, the most amazing fact of human life and I should like to spend much of this first chapter in groping about in the luminous shadow of my infant world because, deeply considered, childish impressions are the fundamentals upon which an author's fictional output is based; but to linger might weary my reader at the output, although I count myself most fortunate in the fact that my boyhood was spent in the midst of a charming landscape and during a certain heroic era of western settlement.[2]

他方彼の中西部観については，彼は「開拓農民」ではなく「開拓農民の息子」であるが故にその「経験」は限定された，表層的なものと言わざるを得ない。なによりも

---

[1] *Ibid.*, p.59.
[2] *Ibid.*, pp.3-4.

彼の「経験」はかっての少年時代の自営農の存続しうる時期の中西部であり，しかもその中西部は少年の視点から見たそれであるが故に，彼の中西部観は時の経過と共にさらにリアリテーの薄れたものになり，理想化されロマンティクな色彩を帯びたものにならざるをえない。「開拓農民の息子」の中にこのロマンティク志向は消失することなく底流に流れ続ける。中西部への回想を基にしたロマンティクな「より穏やかな作品」"milder fiction"とその現実と対峙するリアリステックな「激しい作品」"hard fiction"[1]との二つの作品傾向を産み出す。否リアリステックな作品自体の中にも常にロマンテックな面を覗かせることになるのである。

3

ガーランドが「開拓農民の息子」のモラリストゆえに覚醒し「リホーマー」への道を選択するのは必然の経過とも言えるが，同時に「開拓農民の息子」の個人主義は「リホーマー」の性格を規定することにもなるのである。

「リホーマー」になった時期については，ガーランドはボストンへ出る前に偶然ヘンリー・ジョージの *Progress and Poverty* を読み深い感銘を受け，ボストンでの独学時期にも"With Henry George as guide, I discovered the main cause of poverty and suffering in the world."[2]と既に中西部旅行前に心情的賛同者になっていた。しかし実質上活動家として積極的に参加していくのは，旅行後11月 The Anti-Poverty Society の講演者依頼の要請に応じた時である。この選択が「間違いなくアナーキストの仲間になる」と見なされ，「保守的なボストンの非難の的」になることは言うまでもなく，「その夜は私にとって本当の意味で分かれ道であった。この要請を拒否することは自分の選んだ文学活動の道にそって気ままに，楽しく進むことになり，受けることは経済的正義の問題が厳しく戦われる領域に入ることになる。」[3]と覚悟の程を述懐している。「リホーマー」Miss Ida Wilbur (A Spoil of Office) は the Alliance in Kansas の聴衆を前に基本的原則を，「すべてのものに平等の権利を，なにびとにも特権を与えず」"*Equal rights to all, and special privileges to none.*"[4]と演説するように，単に経済問題にとどまらず性，人種と社会全体にわたり「特権」を廃し「平等」を求める理想主義的色彩が強いものである。

ガーランドは National Single Tax Conference (1880年9月1日) に代議員とし

---

[1]Pizer, Donald. *Hamlin Garland's Early Work and Career.* New York: Russell & Russell, 1960, p.54.
[2]*A Son of the Middle Border,* p.280.
[3]*Ibid.,* p.322.
[4]Garland, Hamlin. *Spoil of Office, Arena* 6 (June, 1892), p.115.

て出席，後日ジェファーソンを念頭においた独立宣言になぞられた"A New Declaration of Rights"（Arena, January, 1891）で次のように「単一税の哲学は――」と，土地の価値には，個人の労働に属する価値と「社会的」価値とも言うべき土地自体の価値の二種類あり，後者は市や州に属するべきもので，これにのみ税をかけることで，土地投機や独占を排除出来るとして，「単一税」に集約する。

> The single-tax philosophy points out that there are two values attaching to land, …a value traceable to the work of some individual's hands, and a value not traceable to individual labor, but due to the labor and presence of the social group. This value can be seen in city lots worth many thousands of dollars, upon which no man has ever put a day's labor. This is *social* value produced by the entire people, belonging to the city, or State. Each man we say should be taxed upon the social value (or deficit) he holds, not upon the value he creates.[1]

彼の「リホーマー」は「開拓農民の息子」に見た個人主義ゆえに，ハウエルズの社会主義的傾向とは基本的な相異点がある。1885年夏に初めてハウエルズと会見した時にも，「ハウエルズは共産主義的改革（*A Son of the Middle Border* では社会主義的改革と記している（331））を心に留めていた。一方私は土地の独占が貧困の根本的原因であり，まず最初に根絶せねばならないと確信していた」[2]と方向が異なることを述べている。即ちハウエルズが「自由競争の排除」を求めるのに対し，ガーランドは社会主義的理論を否定して「自由な競争は悪ではない」とし，「巨大な富は自由な競争から生じるのではなく，自由な競争が欠けているからである」[3]と競争の必要性を前提に，競争のための「機会の平等」を求めるのである。

> The conference began therefore by stating its belief in equality…not in equality of powers, not equality of virtue, not equality of possessions, but equality of opportunity, opportunity to acquire virtue, wisdom, and a competency.[4]

---

[1]"A New Declaration of Rights." *Arena* 3 (January, 1891) p.164
[2]*Roadside Meetings,* p.64.
[3]"A New Declaration of Rights." p.169.
[4]*Ibid.,* p.159

自由競争と独占の排除の命題のなかで，例えば社会改革者の鉄道の土地独占の規制のために政府の鉄道支配を求める綱領に対してより大きな独占という観点より異論を唱えた場合もある。[1]（National Single Tax Conference（1980年9月1日に代議員として出席）

「リホーマー」の創作への観点は，問題点は土地の独占にあること，個人主義であり，社会主義的傾向を志向しない点にあると言える。

4

「都会の人間」とは，中西部を外部から客観視しうる観察者の立場を語るものであり，創作面から見るならば"Veritism"の呼称で知られる「リアリスト」としての視点である。ガーランドが文学の夢を抱いてボストンに出た1884年当時の文壇は，従来の「お上品な伝統」が依然として主流を形成する一方，進化論の Darwin，Spencer らの体制に挑戦する新しい潮流の中で，ハウエルズがリアリズムを掲げて挑戦していた状況にあった。1885年の夏にはハウエルズの知遇を得て"He was my standard in all matters literary."[2]と信奉者となり，ラデカルへの道を歩むことになったと言えるのである。

ガーランドのリアリズム論は"Veritism"の提唱として知られる唯一の文芸評論集 *Crumbling Idols* (1894) に纏められている。今日の評価は文学理論乃至リアリズム論の進展という観点からなされ，「その本の宣言は当時の伝統主義者らを狼狽させたが，実は新しいものをほとんど含んでいなかった。」[3]「文学的アナーキスト」[4]「新しい地方主義」[5]「リアリストよりもむしろ，おそらくは印象主義者」[6]「ヴェリテズムはハウエルズのリアリズムが地域的規模で強調した以上のものではない」[7]等などおしなべて低いものである。若いガーランドが創作と同時平行して1890年より随時雑誌に発表したものを整理仕直したものであり，文学理論よりもむしろ自己の創作姿勢を正当化を主張したものと見た場合，上記のような低い評価も彼の視点を明らかにするものとして有益である。

---

[1]Pizer, Donald. p.63.
[2]*Roadside Meetings*, p.62.
[3]French, Warren. "What Shall We Do About Hamlin Garland." *The Critical Reception of Hamlin Garland.* Troy, New York: The Witston Publishing Company, 1985, p.331.
[4]Thompson, C.M. "New Figures in Literature and Art: Hamlin Garland." *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p.28.
[5]Walcutt, Charles C. "Adumbrations: Hamlin Garland." *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p.219.
[6]Harkins, E.F. "Famous Authors: Hamlin Garland," *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p.44.
[7]Morgan, H. Wayne. "Hamlin Garland: The Rebel as Escapist." *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p.264.

リアリズムに代わり"Veritism"なる語を用いた理由として，ガーランド自身が「アメリカ小説における真実への戦いを続行する際に，私の理論を最も述べる語としてヴェリテズム，Eugene Veron の"Esthetics"と Max Nordua の"Conventional Lies"の読書から得た語を採用した」と語の由来を明らかにし「真実」が主眼であることを強調した上で，続けて「ハウエルズは作品が「真実でありうる」("verifiable") 作家の流派の指導者である」と述べ[1]，別の箇所では「リアリズム又はヴェリチズム（又アメリカニズム，根底においてはこれらの語は実際上は同じことを意味する」[2]とも述べており，内容においてハウエルズのリアリズムと大差ないことが指摘されている。[3]

> This theory of the veritist is, after all, a statement of his passion for truth and for individual expression. The passion does not spring from theory; the theory rises from the love of the verities, which seems to increase day by day all over the Western world.[4]

このように覚醒した「開拓農民の息子」として「真実への情熱の陳述」「真実なるものへの愛」と「真実」を文学の使命，基準として第一義に置く。「真実」を得るためには，まず第一に *Crumbling Idols* の前書きで「この本は若き芸術家に対する因習の束縛を弱めることを意図したものである」と宣言するように，過去の伝統から解放された新しい文学が必要であるとする。「アメリカ文学が偉大になるためにはアメリカのものにならなければならない，そしてアメリカのものになるためには我々自身の土地や気候に固有の状況を扱わなければならない」[5]とヨーロッパからの，ひいてはその影響を保持せんとする東部からの文学的独立を大胆に主張するのである。その上で伝統に代わりうるものとして「最も熟知するものについて，最も関心のあるもののために書くこと」によって，「自己，地方，時代に対して真実でありうる」と地方色文学を提唱するのである。

> This is, I believe, the essence of veritism: "Write of those things of which you know most, and for which you care most. By so doing you will be true

---

[1] *Roadside meetings*, p.32.
[2] *Ibid*., p.252.
[3] Johnson, Jane, *Crumbling Idols, xxiii*. Pizer, Donald, p.125. McCullough, Joseph B., *Hamlin Garland*. Boston: Twayne Publishers, 1978, p.35.
[4] Garland, Hamlin. *Crumbling Idols*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1960, p.21.
[5] *Ibid*., p.59.

to yourself, true to your locality, and true to your time."[1]

彼は既に1885年の夏ハウエルズとの会見の中で，地方色文学の必要性を述べており，中西部旅行前に素地は準備されていた。創作舞台発見後は自己の体験と直接観察によって最も熟知する故郷中西部の現実のあるがままの姿を描き出してきた自らの文学実践への正当性の弁護である。

興味があるのは，批判家が矛盾と非難されてきたVeritismの名で言うリアリズムと印象主義との関係である。地方文学のあるべき姿を「人生が文学のモデルであり，真実が文学の基準であり，個人主義が文学の彩色の要素である時に，――」"When life is the model and truth the criterion and individualism the coloring element of a literature,"[2]と期待を込めて語るなかで，主観の重要性をも主張するのである。主観の強調は印象主義に通じる要素となり，事実ガーランドが印象主義を"Impressionism, in its deeper sense, means the statement of one's own individual perception of life and nature, guided by devotion to truth. . . ."[3]と述べる時，「真実への専心によって導かれた」と注意深い言い方ながらも「真実」と「各自個人の認識」とは矛盾なく同居している。[4]この矛盾こそ「開拓農民の息子」としての個人主義とモラリズムと客観を求めるリアリズムとの矛盾であるといえる。さらに「リホーマー」としては，「リアリストやヴェリティストは本当は楽天主義者であり夢想家である。あるがままの観点からと同様にあるかもしれない観点から人生を見る，あるものについて書くが，それで，最も上手くできたときには，対比によりあるべき姿を示唆する」[5]と文学の社会的効用を期待しているのである。すなわちガーランドのリアリズム論の矛盾は，「真実」を追求するリアリストと，印象主義の名において主観による価値判断を要求する「開拓農民の息子」「社会改革者」との矛盾に起因するものであるといえよう。

もう一点は自然主義との関係である。*Crumbling Idols* の編者 Jane Hohnson は，ガーランドがリアリズムを用いなかった理由を，そのイントロダクションにおいて「リアリズムの方法」は"the accurate description of contemporary life"を意味して一致するところであるが「その哲学」は"depicting man as an animal naturally responding to environmental stress"というように自然主義と区別されていなかったので，

---

[1] *Ibid.*, p.30.
[2] *Ibid.*, p.120.
[3] *Ibid.*, p.42.
[4] 押谷善一郎氏は第11章評論集『崩れゆく偶像』で詳細に論証され，矛盾を「ご都合主義」と指摘されている。『ハムリン・ガーランドの人生と文学』大阪：大阪教育図書，1989，p.139.
[5] *Crumbling Idols*, p.43.

「ゾラのような小説は自然主義ではなくリアリズム又はフランス・リアリズムに分類されていた」し又"sensationalists","romanticists"と非難されていたとリアリズムの語をめぐる当時の状況を説明している。さらに Frank　Norris の *McTeague* について "What avail is this study of sad lives? for it does not even lead to a notion of social betterment."[1]との発言からして，ガーランドは評判の悪いゾラ的な側面を否定しただけではなく，積極的に自然主義的な文学傾向を明確に拒否している。

「開拓農民の息子」の伝統的モラリズムは「社会改革者」を必然の結果とする。しかし「開拓農民の息子」の個人主義は「社会改革者」をあくまでも改革の枠内に留めて，社会主義には導かない。よって改革する社会状況が解消又はその必然性が解消すれば改革者である必然性もなくなるのである。他方「開拓農民の息子」「社会改革者」は作家としての「リアリスト」を必然とした。「リアリスト」の真実追求は「開拓農民の息子」のロマンテックな性向と対立する，又「社会改革者」とは真実追求のレベルにおいては一致するが，プロパガンダにおいては対立することになる。

ガーランドの作品は「開拓農民の息子」「社会改革者」「リアリスト」の三つの視点が時の経過のなかで両立することにより効果的に，対立することにより曖昧となり，濃淡の差を示しながら同居していると言えるのである。

5

最初の時点での彼の文明批判は「開拓農民の息子」の視点によるものであって，「リホーマー」や「リアリスト」の視点は前面に出てきてはいない。中西部の荒廃した現実に，覚醒した「開拓農民の息子」はモラリストとして又自ら抱いていた中西部観を破壊された憤りをそのままに表現したのである。その文明批判の目的は，東部の対中西部観即ち「楽園神話」の虚構の打破にむけられたのである。中西部の実相を提示することにより，その「楽園神話」の牧歌的農民像と安全弁としての社会的機能を完全に否定することであった。

このことはガーランドの東部の「お上品な伝統」との決別を意味する。その「お上品な伝統」を支える *Century*，*Harpers* 等の一流雑誌の「魅力ある恋愛物語を」("Give us charming love stories!") とロマンスの要請に対しても，「嘘は十分聞いてきた」("No, we've had enough of lies,")[2]とその姿勢を否定する。ガーランドがボストンに帰るやいなや屋根裏部屋に閉じこもり，出版への配慮などは一切せずに憤りを直接吐

[1]Parrington, Vernon Louis. "Hamlin Garland" *The Critical Reception of Hamlin Garland,* p.108.
[2]*A Son of the Middle Border,* p.319.

露して，ガーランド自身が，「詩的」でも「牧歌的」でも「農民にはユーモラス」もなく，彼らの生活は「ほとんど信じられないほど悲劇的な空しさ」318であると評する，"A Common Case""Daddy Deering""John Boyle's Conclusion"等の最初の短編[1]は，「お上品な伝統」との決別宣言であったと言えよう。

まず「陽気な陽気な農夫像」("the merry merry farmer")[2]を描き出すことで「楽園神話」を支えている東部の作家達への批判をする。この批判は「陽気な陽気な農夫」像が，外部に対して現実の過酷な農民の実像を覆い隠しているという事実だけではなくて，当の農民に「アメリカで最も過酷な労働をし且つ最も報われない者であるという事実を見えなくさせている」と，その責任を厳しく問いかけていくことになる。

> "Writers and orators have lied so long about 'the idyllic' in farm life, and said so much about the'independent American farmer,' that he himself has remained blind to the fact that he's one of the hardest-working and poorest -paid men in America. See the houses they live in, —hovels."[3]

「楽園神話」の否定の第一の手法は，「農場の牧歌的生活，自由な農民像」を打破するために，最も悲惨な「実証例」の提示をする。例えば"A Common Case"の場合には「かっては幸せであった少女の幽霊のような姿に偶然会って，——幸せな少女時代の悲劇的な結末（"the tragic end of a happy girlhood"）を見て取ったように感じた」[4]と「なお一層憂鬱なメモ」("a still more depressing note") に書き留めているように，悲劇的状況の象徴を農民の妻の宿命に見て取るのである。「開拓農民の息子」としての母への思いがあることは言うまでもないが，女性こそが労働力として，妻として，母として二重三重苦を担わなければならない最大の犠牲者でもあったのも事実である。その悲惨さにおいては"A Common Case"に劣らないし，又それゆえに出版もされなかったと思われるのが，開拓農民夫婦の末路を描いた"John Boyle's Conclusion"である。前者が農夫の妻に焦点を絞ったのに対し後者は農夫であるがゆえに西部開拓農民の人生を，より広い社会的コンテクストの中で提示することになる。南北戦

---

[1]"A Common Case"は「新しくできた民主的な月刊誌」Belford's 1号(July 28, 1888)で出版，短編集 *Wayside Courtship* (1897年) に"Before the Low Green Door"と改題出版の際は，前半部（第三者的立場からの客観的説明）を省略。"Daddy Deering"も同誌に"An Uncommon Case"のタイトルで受理されたものの出版は *Main-Travalled Roads* 後の1892年になってからである。"John Byole's Conclusion"は結局出版されなかった。この未発表の作品は，Donald Pizer が発見，*American Literature* 31(March, 1959)にて発表。以後テキストからの引用はページ数のみを記す。

[2]*A Son of the Middle Border,* p.109

[3]"Lucretia Burns" *Other Main-Travelled Roods.* New York: Harper & Brothers, 1910, p.102.

[4]*Roadside Meetings,* p.114.

争から帰還後30年間，小麦の低価格と自然災害のために各地を移住の末より安い土地を求めてダコタに移住して収穫なしの三年目の現在，干ばつの上に皮肉にも雨とひょうのために全滅し，夫は絶望の末に鎖を体に巻き付けて川に身をなげて自殺し，そのショックで妻は，Daddy Deering と同様に，精神錯乱（delirium）の果てに郡の救貧院で人生を終えるのである。

「実証例」は例外なく経済奴隷に匹敵する労苦から暫時精神的崩壊をきたす経過を辿るのである。マチルダの独白によって描き出される「幸せな少女時代の悲劇的な結末」を例を取るならば，「笑いの喪失」と「幽霊のように」痩せこけて，「死のみを唯一の休息」に象徴される。娘時代の豊かな人間的情感を喪失し，「一生古い丸太小屋に住み，尊敬できず好きでもない男のために骨と皮になるまで働かなければならず」「こんなにも早く死ぬ，しかも満足することもなく死ぬとは思ってもみなかったわ」「私の人生は失敗だったわ」と深い後悔と絶望感，最後を見取られるのを拒否する程までに夫への激しい嫌悪感を抱き，意識において妻も母も超越して幼子へと戻ることで，人生を否定して悲劇的一生を終えるのである。

> "No, I'm all ready. I ain't afraid to die. I ain't worth savin' now. Oh, Marthy, I never thought I'd come to this—did you? I never thought I'd die—so early in life—and die—*unsatisfied*."[1)]

結婚を境として経済システムに組み入れられて逃れられない悲惨な状況を提示するが，文明批判の意図に沿った工夫も認められる。憎悪の対象となる夫の人物像であるが，取材メモでは「家畜の世話だけしか知らない粗雑で無知な夫」"the crude and ignorant husband who knew nothing but the care of his cattle, unthinking, irreligious."(114) とあるが，後半のマチルダ独白でも"a smallish man, with a weak, good-natured face"(197) とさりげなく書き留めているにすぎない。決して働かない又は虐待する非情な夫でも加害者の立場に立っているわけでもない。積極的な加害者であるならばマチルダの悲劇は家庭内の問題となり，社会的コンテクストを失う。しかしながら第三者が"O, good enough sort; 'bout an average. Hard worker himself in his way; thinks his wife ought to do the same. He works well enough, but he's lackin' somewhere. He lacks vim-staminy."(190) と説明するように，経済的に苛酷な現状の前では「十分良く働く」だけでは加害者となるのである。夫もまた社会の

---

1)"A Common Case" *Belford's* 1(July 28, 1888) p.195. 以後テキストからの引用はページ数のみを記す。

被害者でもあることを明らかにした上で，その責任に言及すると同時にマチルダの憎悪の正当化を下しているのである。よってマチルダの夫への憎悪には夫を通り越して社会への怒りを込めた抗議である。

"Common Case"のタイトルで連想されるのが"Daddy Deering"である。実はこの短編に付けた最初のタイトルが"An Uncommon Case"[1]であったのである。

開拓初期の農民 Daddy Deering の一生を作者の分身13歳の Milton Jennings の視点を通して語ったものでガーランドの幸福な少年時代の回想記という意味においては，"his warm recallection"[2], "milder fiction"[3]と一応分類出来るとも言える。

Deering はマチルダの夫 Joe Bent とは正反対に，ずば抜けた体力に恵まれ，自信と独立心に溢れ，真に時代を謳歌した楽天的個人主義を象徴するに相応しく，少年の「英雄」的存在であった。「自分の人生は失敗であった」と無念さと人生を拒否して死に行くマチルダと比較すれば，満足感を得ることが出来た時期を持つ Deering の人生は幸福なものと言えよう。しかしながら，時代の変化と自己の存在価値の唯一の証明である体力の喪失と共に，彼の精神は陰鬱さを増し精神的破綻をきたす。指を潰し，不自由な足となり，自らの時代の名残りを留める唯一のバイオリンさえも持てなくなった彼には自殺しか残されていない状況にまで追い詰められ，自殺の直前で精神錯乱による凍死で長い一生を終える。自殺という意識行為を避けて「精神錯乱」"delirium"(139)による死によって彼の最後を弔うガーランドに，この「英雄」像に「お上品な伝統」のいう「牧歌的農民像」と同一ではないが，厳しい生活環境を担いながらも，人間らしく生きることができる意味において「牧歌的農民像」認めたのである。しかしこの「牧歌的農民像」も現在には生きられないことを示したのである。「コモン・ケイス」や「ジョン・ボイルの結論」の直接的な激しい社会批判に比較して「より穏やかな作品」であっても，これをもって「稀なる事例」とするガーランドに社会への皮肉と怒りを認めることは容易であろう。いずれにしても「開拓農民の息子」は悲劇的状況を提示することで，文明批判を行う一方で，犠牲者への愛情を惜しまない。

第二の特徴として，「自然」の扱い方がある。

ジョン・ボイルを直接破滅に追いやったのは，灼熱のような暑さ，ひょう（雹），あらしと自然であることを踏まえて，中立な存在であるとした上で，McCullough「しかしながら，しばしばガーランドは自然への見解について曖昧"ambivalent"である」[1]，Pizer はガーランドの講演での「ただ単に偏らないだけ」"simply impartial"との発言

[1]Pizer, Donald, p.56.
[2]McCullough, Joseph B., p.50.
[3]Pizer, Donald, p.53.
[4]McCullough, Joseph B., p.39.

を引用しながら，「社会正義が農民の苦境への鍵であって，自然ではない」"Social justice, Garland believed, was the key to the farmer's plight, not nature.[2]と，自然は悪くないことを前提として時として悪なる存在として働く説明をしている。「自然は悪くない，人間の法律が悪い」"Nature is not to blame. Man's laws are to blame"[3]は，「開拓農民の息子」と「リホーマー」に共通する基本的視点である。しかしながら，この時点においては「リホーマー」の視点が明確に見えないがゆえに，「人間の法律」の内容の曖昧さによるものである。

ガーランドの「自然」に「開拓農民の息子」たるモラリストの姿とノスタルジアの投影を認めたい。投身自殺に追いやられる当日のジョン・ボイルでさえも「小麦に害を与えようとも，その日は美しかった」"The day was beautiful, though damaging to the wheat...."(61) と自然の中でのみ人間的情感を会間みることができるのである。マチルダにしても，結婚以来現実の「かっては幸せであった少女時代の亡霊のような姿」に対して「かっては幸せであった少女時代」の感受性豊かな情感の発露は牧歌的な美しい「自然」の中においてのみ可能であった。

> "Don't you remember, Mattie, how beautiful the moonlight seemed? It seemed to promise happiness—and love—but it never come for us. It makes me dream of the past now—just as it did of the future then;....(198)

又精神的崩壊に至り，宗教による救済の否定，夫への激しい憎悪と拒否を示すマチルダに残された唯一の救済は「自然」である。無論一時的な精神的救いでしかないが，「自然」の美しさに人間的感情を回復して死を迎えることが出来るのである。かくして「自然」の中の人間像に作者の人間は生来善なる存在であるとの認識と信頼をみるのである。ところが現実社会のシステムに組み込まれた人間像はその重圧に肉体的にのみならず精神的にも破壊された存在でしかない。この「自然」と「文明」を対比させる手法をもって，同じ人間をかくも変質させる文明の責任を問うのである。

第三の特徴として「論争的，教訓的傾向」の顕著なことである。Taylor は，まれに登場人物に議論されるとした上で「さらに希ではあるが ("even more rarely")，作者自身の見解を説き聞かせるために語り手 ("a chorus character") を採用する。」[1]と指摘するが，Taylor の議論の範囲にこれら初期の短編が入っていないので「さらに希で

---

[3] *A son of the Middle Border,* p.307.
[1] Taylor, Walter Fuller. *The Economic Novel in America.* Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1942, p.162.

はあるが」としているが，これらには語り手（"a chorus character"）に相当する第三者・解説者として，又はサブ・プロットを導入し副人物にその役割を担わせることにより，文明批判の役割を担わせているのである。A Common Case にも，この第三者的立場による状況説明とも言うべき前半部を付けていたが，"Before the low Green Door"に改題，短編集 Wayside Courships（1987年）収録時には省略されて今日に至っている。この省略自体作者の社会意識の減少を示唆するものであるが，逆に発表時の対現実批判の激しさを物語るものでもある。

マチルダの場合，幼なじみの Amos Ridings,村の知識人として中西部の実情に詳しい郡教育長の Norman Wheelock と村の学校の校長の Rance Knapp による対話よりなる前半部は，マチルダの回想形式による独白に客観性を付与し，事実としての重みを与えるのである。さらにマチルダの物語を補強し，社会的コンテクストの中に置き，タイトルの「ありふれた事例」が決して例外的なものではないと一般化することで，文明批判に説得性を付与している。「事実は，マチルダは殺されているのであり，この地方の数多くの女性達もまさしく同様である。普通の状態だ。」"The fact is, that woman is being murdered, just like thousands of others like her in this country. It's the rule."(191) しかも「我々が自慢しているこの偉大な時代の威厳と栄光」"the grandeur and glory of this great age we boast about"(192) たるアメリカ文明の実態であり，「アメリカ文明を正当化できない」(193) のである。

副人物で，「実証例」ジョン・ボイルの目撃者兼解説者である若い商人夫婦 Porter Alling は，「妻の健康のためと不動産会社のおおげさな宣伝"the flaming advertisements of some land syndicate"に引きつけられて」(70) 東部から移住してきた。彼らはまさしく「楽園神話」そのものに乗せられて来た，所謂「楽園神話」の「牧歌的農民像」の体験者となり，解説者なのである。「若者のすばらしい楽天主義を持っていた。大地に叩き付けられても，笑って再び起き上がることが出来た。」Porter 自身にして二年目で中西部の将来への展望を失い，しかも小麦全滅の中で東部に逃げ帰る見通しさえ立たないのである。産業革命による都市労働者の失業問題の解決策として，中西部はその余剰人口の吸収という「安全弁」の役割が期待されてきた。次のように「ぼくたちは"理想化された農場生活" "自由と自立" を試してみて，何の価値もないのを知った」と「楽園神話」の斯瞞を告発するのである。

> "Together we've busted a healthy crop of delusions, eh? Exploded divers and sundry myths, anyway. We have tested 'poetical farm life,' the 'free and independent,' and found it *N.G.* "John Boyle's Conclusion"(71)

出発時点における文明批判に見る悲惨な「実証例」の提示，自然と文明の対比，第三者・解説者の手法は，「開拓農民の息子」の憤りが「リアリスト」としての客観的，抑制された姿勢に勝っていること，「リホーマー」としての原因の明確化はこれからであるを示している。

6

当初の文明批判の基盤となった「開拓農民の息子」としての視点は，以後作者の根底をなす視点として途絶えることなく継続していくのである。その上に作者が"As a reformer my blood was stirred to protest. As a writer I was beset with a desire to record in some form this newly born conception of the border."[1]と語るように，両者の視点を明確にしていくことで，批判すべき「文明」の内容を一段と追及していくことになるのである。「開拓農民の息子」のモラルと怒りによる「真実の追求」の姿勢において両者への進展は必然的過程と言えるが，「リホーマー」と「リアリスト」の関係においては，前者が主義である以上プロパガンダの性格を帯び，論争・教訓的傾向を作品に持ち込み，他方後者が主観が排し客観的，抑制された表現を要求するものであり，必然的に矛盾を内在することになる。

作者の理想は次のように，「リアリスト」であるが，客観的，冷徹な観察者だけではなく，「開拓農民の息子」「リホーマー」にみる道徳的価値観を備えた「リアリスト」であり，「あるがままの姿について書く」が「あるべき姿を指し示す」ことにあった。

> The realist or veritist is really an optimist, a dreamer. He sees life in terms of what it might be, as well as in terms of what it is; but he writes of what is, and, at his best, suggests what is to be, by contrast.[2]

ハウエルズの「説教するな，例証せよ」"Don't preach—exemplify.[3]を有益な忠告として，「リホーマー」と「リアリスト」を融合させようとしたのである。この両者の相関関係から引き出される結果を"Up the Coulee"[1]に力点を置きながら検証することにする。自然主義の有無を巡る検証となる。

この作品は多くの短編の中でも最も自伝的色彩の強いものであり，且つそれぞれの

---

[1] *A Son of the Middle Border,* p.318.
[2] *Crumbling Idols,* p.43.
[3] *A son of the Middle Border,* p.354.

短編に現れた諸要素を含み，*Main-Travelled Roads*[1]時点における総括の意味合いを持つものと言えよう。

この作品では，「リホーマー」の視点は「実証例」である弟グラントを，「リアリスト」の視点は「第三者・観察者」である兄ハワードを通じて語られる。

兄ハワードが家を出た後，父の死により一家を支えているグラントは「四年間で我々を食い尽くす抵当」のために農場を手放し，条件のより悪い現在の農場に移ってほぼ2年，悪戦苦闘する弟グラントは，マチルダやジョン・ボイル像に繰り返し見てきた経済的破綻から精神的崩壊に辿る開拓農民の「実証例」である。

かってマチルダが「私の人生は失敗だわ」(295)と述懐し，ジョンが"a sand fly lean with hunger"と認めたように，グラントも又"Just like a fly in a pan of molasses" (86)と脱出できない絶望的状況にある無力な存在でしかないとの自己認識に至り，成功者の兄ハワードの贖罪行為である農場の買い戻しの申し出に対して，最後にグラントは顧みなかったハワードへの責任転化を否定し，「今になっては，金では機会は得られない。——自分は完全な失敗者だ。人生は我々にとって99パーセント失敗だという結論に達した。」(97) と，30歳にて人生は失敗，やり直せないと絶望と諦めの境地あることを告白するのである。

グラントの絶望について，Bledsoe は自然主義の存在を認めない立場から，"He ain't to blame for his brains. If you and I'd had any, we'd 'a' succeeded, too."(76) と成功は個人の能力の問題であると見るグラントの妻ローラを踏まえて，「環境に捕われている」だけでなく「受け入れている」と「受け入れている」方に力点を置いて個人の道徳的責任感を重要視する。

> Grant McLane's tragedy is his own moral responsibility as much as Howard's: it is not merely that he has been trapped by circumstance but that, as Laura cries out, he has accepted it. It is against the backdrop of the American Dream, of the right and responsibility of every man to be free, to succeed, that Garland's tragedies display themselves. A belief in this dream, and an indignation against whatever frustrates it, informs his writing as it does not that of his naturalistic contemporaries.[2]

---

[1]Garland, Hamlin. *Main-Travelled Roads.* A Signet Classic, New York, 1962. 以後テキストからの引用はページ数のみを記す。

[2]Bledsoe, Thomas A., "Introduction to *Main-Travelled Roads: Six Mississippi Valley Stories* by Hamlin Garland," *The Critical Reception of Hamlin Garland.* p. 195.

グラントが「環境を受け入れている」のは明白であるが，「受け入れている」ことが個人の責任に繋がるのか，「環境に捕らわれている」こととの関係においてさらに検証する余地がある。

マチルダは破滅の真の原因が理解できず，最も身近な夫を対象とするしかなかった。ジョンも同様に"It seemed as if all had conspired against him. God, Man, and Nature had assaulted him as if by preconcerted plan."(62)「神，人間，自然」と自らを取り巻く総ての環境をあげるしか術はなかった。しかしながら，「リホーマー」の視点を担ったグラントは，農民を巡る客観的状況分析において，その原因を公有地の減少を背景に土地価格の高騰をもたらす土地投機師"speculator"と「明らかに生皮を剝ぐ」ような法外な小作料にあるとして，土地投機師の存在を容認し過酷な小作制度を維持する土地制度に集約するのである。

> "The worst of it is," said Grant without seeing Howard, "a man can't get out of it during his lifetime, and I don't know that he'll have any chance in the next—the speculator'll be there ahead of us."
>
> The rest laughed, but Grant went on grimly:
>
> "Ten years ago Wes, here, could have got land in Dakota pretty easy, but now it's about all a feller's life's worth to try it. I tell you things seems shuttin' down on us fellers."
>
> "Plenty o' land to rent?" suggested someone.
>
> "Yes, in terms that skin a man alive. More than that, farmin' ain't so free a life as it used to be. This cattle-raisin' and butter-makin' makes a nigger of a man. Binds him right down to the grindstone, and he gets nothin' out of it—that's what rubs it in. He simply wallers around in the manure for somebody else. I 'd like to know what a man's life is worth who lives as we do? How much higher is it than the lives the niggers used to live?"(85-86)

グラントが告発する「土地投機師」による土地価格の高騰と「明らかに生皮を剝ぐ」小作の実体を，作者自身が「単一税物語」"a single-tax story"と語り，ハウエルズの助言のおかげで陥りがちな「教訓をたれる」のではなく「例証的に示す」ことができたと語る"Under the Lion's Paw"にて明らかにする。テーマを絞り込んだ構成ゆえ

---

[1]Walcutt, Charles C., p. 222. "the most admirably executed of all the stories" (Taylor, p.161), "the best tale in the volume" (Chamberlain, p.121.)

に,[1] Walcutt の「統一と首尾一貫性のあるすばらしいもの」"a miracle of unity and coherence"を始めおしなべて高く評価されている。

> In 1889 I wrote a single tax story, "Under the Lion's Paw," which *Harper's Weekly* published…It is rather remarkable that I kept as clear of preaching in my stories as I mostly did, but this was due in a large measure to Howells, who had taught me to exemplify, not to preach.[1]

地主バトラーについて，Walcutt は「最後の場面で地主は不自然に邪悪になっている」「地主は経済的必然性によって余儀なく貧乏な農民の生活を破滅させるのではない」として「生来の悪人」と個人的資質に力点を置いている。この見解に大井氏は個人的資質に求めるのではなく「ガーランド自身，この人物が「金をもうけるには土地の投機にかぎると信じ」「貯めこんだり，商売でもうかった金を，彼は全部，競売にでた土地や抵当流れの土地を買うのにつぎ込んだ」と書きとめているように，バトラーが土地投機師であるという設定を見逃してはならない。」[2]と指摘されているところである。Bledsoe も"Butler is no less responsible and no less personally evil because he profits by an iniqutous social scheme."[3]又同じく Saum も，"Jim Butler, the ugly embodiment of an unjust land system"[4]とバトラーの個人的資質ではなく「不正な社会機構」「不当な土地制度」によるとする。

その代理人たる「郡有数の土地所有者」となった投機者バトラーの仕組みは以下である。借り手のない荒れ果てた2500ドルの価値の農場を，小作人ハスキンズに三年後に再度貸すか又は売る契約付きで，価格の一割の小作料で貸す。三年間ハスキンズは「ローマのガレー船の奴隷でさえそれほど骨身を削って生きることはなかったであろう」程の労働の末，元の倍の価値のある豊かな農場とした。売る段になるとバトラーの要求は，売値は現在の農場の価格5500ドルであり，再度その価格の一割で小作するか，又は頭金1000ドルで残りは年一割の抵当に入れて買うかの選択である。バトラーの要求を保証しているのは,「それは法律だ。当たり前のことだ。誰もがやってるんだ。」の言葉どおりに，法律そのものである。さらに経済的に可能にしているのが税制である。「土地貧乏」"land poor"(146)と呼ばれ，「土地の税金の払う金がないと言い続け，20の農場を持っているにもかかわらず貧乏であるとの印象を与えよう苦心していた」

---

[1] *Roadside Meetings*, p.125.
[2] 大井浩二『アメリカ自然主義文学論』東京：研究社，1973，p.32-3.
[3] Bledsoe, Thomas A., p.195.
[4] Saum, Lewis O., "Hamlin Garland and Reform." *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p.353.

(147) とカモフラージュしながら，その実，魚釣り・狩りの安楽な生活，さらには1年間を下院議員の義兄とワシントンやボストンで過ごすなど，大金持ちの「不在地主」なのである。

小作農民ハスキンズは，労働やつぎ込んだ金すべて自らが付けた付加価値を自ら買うこととなり，働けば働くほどに自らの首を締めるはめとなり，重い抵当に苦しみ続ける以外にない。その結果は抵当権を設定している土地は，抵当を払おうとして悪戦苦闘している農民の姿とその努力が間違いなく無駄であることを示すように「ゆっくりだがしかし確実に」"slowly but surely" (147) 手に入ってきたとあるように，まさしく「ライオンに踏まれている」のである。このように「不当な土地制度」の支配は個人的資質の問題を越えていると見なさざるをえない。

「リホーマー」の視点は，単に現状提示だけではない。ハスキンズが「ローマのガレー船の奴隷」以上の労苦に耐えたのは，奴隷ではなく「自由人」"a free man"(152) であるという誇りであった。地主バトラーに「二度と他人から盗めないようにしてやる，畜生め」155と怒りを一瞬爆発させるのも小作人としての「不当な土地制度」に対する憤りである。これは「若いラデカル」Douglas Radbourn をして，農民達が「金以上のもの，人生を生きるに値させるすべてのものを奪われている」すなわち「操り人形」"automata"「機械」"machines"(103) ように精神的奴隷状況に甘んじている現状認識の上に立ち，まず「気高き不満」"a noble discontent."[2]を持つべきであると精神的奴隷状況からの覚醒の必要性に答えたものである。

グラントはただ単に「受け入れている」だけではない。"discontented and mulish" (71) を持ち，母が"Seem's if he'd go crazy."(92) と希望もなく嘆くように，精神的崩壊に近ずくまでに現実と格闘しているのは前提である。ハワードに対する憤りも，単に彼の無視と怠慢に対してだけでなく，富の象徴としての彼に対して，貧富の格差を助長する社会構造への批判を込めたものである。

とするならば一度は爆発させた怒りも諦めとなり「がっくりとうなだれた頭を両手でかかえこんでいる」ハスキンズの姿が，前の小作人の「可哀相なヒグリーが，抵当を外そうとして死ぬほど働いた後，農場と彼の呪いをバトラーへ残してダコタへと去って行った」(147) 第二のヒグリーと同じ宿命を物語っているのは間違いないところである。「不当な土地制度」の支配の堅固さと同時に，「土地制度」と言う一社会制度であるが，農民にとってはすべての「環境」を意味したのである。ただこの支配する環境の存在をもって即自然主義に結びつけるわけにはいかない。「リホーマー」の告発

---

[2]"Lucretia Burns", p.104.

すべき対象としてのそれであり，作者全体の認識を判断するには「リアリスト」の視点を踏まえる必要がある。

その「リアリスト」の視点は兄ハワードに付与されている。作者の自伝で語る体験そのままに，ハワードは「実証例」グラントとの対峙により，第三者・解説者から当事者への転換を迫られることで，無知から認識への過程を経ることにより「リアリスト」の役割を果たすのである。

俳優兼劇作家として「すばらしい成功」を得て帰郷するハワードは「今なお西部人であることに誇りを持ち」「愛する人に近ずいていく恋人のように，胸の奇妙な高まりを感じ始める」(54) とノルタルジックな感傷を抱いた「開拓農民の息子」として当事者である。しかし故郷を離れて東部で10年という時と経過で，彼の意識は西部の現実とかけ離れた無知な第三者のとなっているのは，母への「パリからの上等な絹地」等々のプレゼント一つとっても明らかである。成功者の優越感から長男としての一家に対する責任の放棄と利己的逃避への認識，それがゆえにの罪の意識，贖罪行為とその無意味さ，を経て現実認識の修正を迫られることになる。

ハワードとグラントを分けたものは何なのか「胸にせまる不可解な人生の謎」"The thrilling, inscrutable mystery of life"(73) に思いを馳せるなかで，「成功は何に値するのか，闘い，競争，誰かを踏みつけることだ」と弱肉強食の生存競争の社会であるとの現実認識に達する。

> What was it worth, anyhow—success? Struggle, strife, trampling on someone else. His play crowding out some other poor fellow's hope. The hawk eats the partridge, the partridge eats the flies and bugs, the bugs eat each other, and the hawk, when he in his turn is shot by man. So, in the world of business, the life of one man seemed to him to be drawn from the life of another man, each success to spring from other failures.(74)

生存競争の社会において，ハワードは自らの予想以上の成功を能力や自由意志ではなく「運」によるものと繰り返し強調するように，「運」の強調は環境決定論の存在を認めるものにほかならない。ハワードとグラントの人生を分けたのも父の死という「運」であった。ハワードは脱出し，死んだ父に代わって一家の重荷を背負ったグラントは脱出できなかった。「環境がおれを作り，おまえを打ちのめした。——運がおれが作り，おまえを裏切った。それは公平じゃない」"Circumstances made me and crushed you. …Luck made me and cheated you. It ain't right,"(96)

「リアリスト」ハワードは自ら環境支配にあることを理解することで，「実証例」グラントの「不正な土地制度」の支配をも理解することができた。さらに支配にある農民の外面から内面へ分け入ることにより，「真の悲劇」を明らかにするのである。

次の一節はハワードを歓迎するささやかな集まりの一場面であるが，「ひょっこりやって来て観る者」には「なんとも楽しい牧歌的な」集まりに見えるのは，「楽園神話」を維持する都市の人間の表層的な田舎観で，作者が批判してやまないところである。しかし「開拓農民の息子」で，しかもそのロマンテック性をグラントによって消しとばされた現在のハワードには，「陽気さは自己保身」にすぎず，「陽気さ」の背後に本当の姿が理解できるのである。若者達は「不満でありながら，しかもそれを認める勇気がない」又「気寄りは若者よりも不満を感じていない」「悲しそうな諦めの溜息」をみせるばかりであるが，心の奥底に秘められた「絶望」や「悲痛」を感知するのである。これこそが「真の悲劇」にほかならない。

> They were hungry for the world, for art—these young people. Discontented and yet hardly daring to acknowledge it; indeed, few of them could have made definite statement of their dissatisfaction. The older people felt it less. They practically said, with a sigh of pathetic resignation:
>
> "Well, I don't expect ever to see these things *now*."
>
> A casual observer would have said, "What a pleasant bucolic…this little surprise party of welcome!" But Howard with his native ear and eye had no such pleasing illusion. He knew too well these suggestions of despair and bitterness. He knew that, like the smile of the slave, this cheerfulness was self-defence; deep down was another self.(85)

ハワードはせがまれて都市での生活，劇場やコンサートの話をすると，農民達の「陽気」"gaiety"さは消え，心のおく深くにある「憂愁」"melancholy"を感じ取ることが出来るのである。「憂愁」こそ，彼らの真の心情を最もよく示す語である。「陽気さは自己保身」にすぎず，「陽気さ」の背後に本当の姿は，「彼らの世間，芸術に飢えている」のであるが，若者達は「不満でありながら，しかもそれを認める勇気がない」又「年寄りは若者よりも不満を感じていない」「悲しそうな諦めの溜息」をみせるばかりである。「リホーマー」が覚醒を求めた彼らの精神的奴隷状態である。しかし「絶望」や「悲痛」の中に「不満」が，村人の一人が弾くヴァイオリンが表すように「満たされない願い」"his unsatisfied desires"「漠然とした内面の憂愁」"his indefinable inner

melancholy"(85) となっているのである。

「再発見した悲劇」とは，世間が「平和で牧歌的」と語るが，その実環境支配の元で，「不満」「満たされない願い」を抱きながら「今夜見たように生きそして死なねばらない」現実なのである。

> As he walked, he pondered upon the tragedy he had rediscovered in these people's lives. … He thought of the infinite tragedy of these livers which the world loves to call "peaceful and pastoral." His mind went out in the aim to help them. What could he do to make life better worth living? Nothing. They must live and die practically as he saw them tonight.(88)

ハワードの贖罪行為としての農場の買い戻しは現実への覚醒の帰着であった。しかしその覚醒は，母を都会へ救出する発想と同様に現実逃避というロマンテックな発想である意味において，真の現実理解に基ずくものではない。作者はこの「リアリスト」としての逸脱を"Branch Road"で見せたのである。

ウィルとアグネスの駈け落ちは倫理性と作品構成との観点より批判家の注目を浴びた。

作者は駈け落ちが，ロマンティクな恋愛の結末ではなく，あくまでもウィルの罪の意識から生じた責任感による贖罪行為であることを強調することで，牢獄と化している不当な結婚の否定に注意深く焦点を絞りながら，社会規範に対して個人の権利，女性の権利，社会正義を怒りを込めて主張している。今日的観点からは議論の余地すらないとしても，当時において社会規範の無視は，当時の「進歩的な者たち」(50) の法的な離婚をせよとの見方をも超えたものであり，同時代の Howells も作者を擁護する立場を堅持しながらも「道徳的には完全に誤り」"all morally wrong"[1]とする。時代を経ると共に「結婚に忠実であるべきかどうかの問題提起をした」[2]とする，進めて「因習的な道徳に対する個人の神聖な権利」[3]と肯定論，さらに「価値観は絶対的なものとして維持されえない」"values can hardly be maintained as absolute.".[4]「むしろさらに進んだ道徳」"rather a more-advanced morality"[5]と積極的な肯定批評が大勢を占め，作者の意図自体は受け入れられてきている。しかしながら作品構成上は，「鉄の

---

[1]Howells, W. D., "Main-Travelled Roads." *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p.17.
[2]Taylor, Walter Fuller, p.161.
[3]McCullough, Joseph B., p.43.
[4]Harrison, Stanley R., "Hamlin Garland and the Double Vision of Naturalism." *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p.325.
[5]Pizer, Donald, p.72.

鎖が切れている」"writing a story in which the iron chain is broken."[6]と指摘があるように，環境支配の世界において具体的な救済の道を求めるとするならば，成功者ウィルの帰郷というような，外の世界からの予期せぬ幸運以外には成立しえない。モラリストとしての「開拓農民の息子」を「リアリスト」に優先させたロマンチックな逸脱と言う外ないであろう。

しかし"Up The Coulee"では，ハワードの農場の買い戻しと言う外界からの幸運を否定することにより，「リアリスト」を優先させた。農場を買い戻す贖罪行為が，グラントによって否定された時，ハワードをしてさらに真の理解を進めるものであり，同時に環境支配の強固さを再確認させるものに外ならない。前に述べたように，グラントが30歳にて，人生は失敗でやり直せないとするのは，環境支配の堅固さを示すものである。それはグラントの絶望の深さを示すと同時に絶望して「受け入れている」ことに納得させるものである。最後「成功者」ハワードと「失敗者」グラントの両者共に環境支配の存在を認める共通理解に達するのである。

無論，作者は自然主義の信奉者ではない。「リアリストやヴィリティストは本当に楽天主義者であり夢想家"an optimist, a dreamer"である。あるがままの観点からと同様にあるかもしれない観点から人生を見る，あるがままの姿について書くが，それで，最も上手くできたときには，対比によりあるべに姿を示唆する」[6]と自己規定する時，「開拓農民の息子」の道徳性と楽観性，さらに「リホーマー」としての社会の進歩の信奉者として同質であるが，決定論に固有の悲観的要素と相いれるものではない。「完全な失敗者」と敗北を認めるグラントは，自らを不当な土地制度の支配下にある無力な「糖蜜の皿の中のはえ」に例えた。「はえ」は文字どおり人間をとるに足らない存在と矮小化した自然主義的人間像のイメージに他ならない。しかしながら最後の場面に認めるグラント像は「はえ」の自己認識に反して，まず「スコットランド系の顔」は「グラントがハワードよりもスコットランド系の血統を継いでいた」(64) すなわち「開拓農民」であった父により似ていることを示している。開拓農民が「威厳」を持った「兵士」に例えられてきたように，彼の労働の姿が「威厳のようなもの」"something majestic"(77) を帯びていたことを思い出す必要があろう。当に「幾多の戦いの経歴を偲ばせるサーベルの切り傷を付けた「古参兵」のイメージで語られるグラント像は，人間の矮小どころかまさにその逆である。真にこの「兵士」のイメージは「開拓農民の息子」としての自由，独立精神に溢れた人間への尊敬，人間賛歌に外ならないのである。

---

[6]Walcutt, Charles C., p.221.
[6]"Literary Prophecy." *Crumbling Idols*, p.43.

> The two men stood there, face to face, hands clasped, the one fair-skinned, full-lipped, handsome in his neat suit; the other tragic, somber in his softened mood, his large, long, rugged Scotch face bronzed with sun and scarred with wrinkles that had histories, like saber cuts on a veteran, the record of his battles.(97)

ガーランドは「開拓農民の息子」として，楽観的個人主義と伝統的モラリズムを受け継いでいた。又「息子」なるがゆえに，彼の対中西部観は郷愁に満ちた牧歌的なものであった。中西部の荒廃した現実との対峙により覚醒し，「開拓農民の息子」の視点より文明批判を行った。それは「真実の追求」を第一義とし，実相の提示により東部の対西部観即ち「楽園神話」の虚構を明らかにすることであった。さらにカーランドは「開拓農民の息子」に「リホーマー」の視点を加えることで，原因追究の形で文明批判を一層局開させると同時にその問題点を地主制度に集約し明確化した。他方「開拓農民の息子」の「真実の追求」は同じく「真実追求」を第一義とする作家「リアリスト」となる。「開拓農民の息子」「リホーマー」として，そのモラル，楽観性，個人主義，改革・進歩への信念は，悲観的な決定論の性格とは相いれないものである。にもかかわらず「リアリスト」の客観的な現実把握の視点は，自然主義的環境支配の存在を認めることとなり，自然主義の先鞭を付けることになった。